



クエリーニ・スタンパリーア財団中庭の改装 (1961~63)

空間を彩る
部分の魅力 ①

ヴェネチア/イタリア
設計…カルロ・スカルパ(1906~1978)

カルロ・スカルパ……。ちょっと気になる建築家でした。とはいっても、知識の大半は、『SD』1977年6月号の特集から得たもので、白黒の解像度の低い写真とスケッチから得たものは、素材やディテールにこだわった建築家らしいという程度だったと記憶しています。その翌年、滞在先の仙台で客死したことで注目されるようになったのではないのでしょうか。

たまたま、2003年の夏にヴェローナのアリーナでのオペラ「アイダ」を見に行くことになって、ついでにカステルベッキオ美術館とヴェローナ銀行を見ることができました。そのほとんどの作品が改修ということもあって、街に溶け込んではいけるけれど、しっかりと主張したデザイン、特に使用される素材の選択、テクスチャーの微妙な違いによるデザイン、メタルワークなど、見るべきものはいっぱいありました。その空間を実際に体験してみて、すごく気になる建築家になり、彼の作品を見たいと思うようになりました。

2013年春に、トリノ・ジェノバ・ペローナ・ヴィチエンツァ・ヴェネチアと北イタリアを横断するツアー「北イタリアに巨匠の作品を訪ねる旅—R.ピアノ/C.スカルパ/A.パラディオ」を企画し、永年の想いを実現することができました。

さて、最初は「クエリーニ・スタンパリーア財団中庭の改装」です。ヴェネチアの細い運河に面した船着き場からポルティゴ・アウラ(集会室)を通り抜けると落ち着いた中庭に出ます。デザインされた水路とモザイクタイルの埋め込まれた打放しコンクリートの壁、そして植栽という限られたヴォキャブラリーで、太陽の動きとともに表情を変えていく心地よい雰囲気のあるいくつかのシーンをつくり出して、ずっといたくなるような空間でした。

表紙 モザイクタイルを埋め込んだコンクリート打放しの壁。打放し面のテクスチャー、モザイクタイルの配列、それに落ちてくるメタルワークの影が美しい
表2 その壁を横から見た水盤と水路のデザイン、流れる水の音、異なる季節にも来てみたいと思いました

写真・文…高田典夫 たかた・のりお

1951年東京都文京区生まれ、東京工業大学卒業。横総合計画事務所、レンゾ ピアノ ビルディング ワークショップ ジャパン、ヘルム建築・都市コンサルタントを経て、アトリエテンを主宰。実践女子大学教授(建築デザイン研究室)、キャンパス計画室長も兼任





アントニオ・カノーヴァ 石膏像陳列室のトップライト (1956~57)

空間を彩る
部分の魅力 2

ポッサーニョ/イタリア
設計…カルロ・スカルパ(1906~1978)

スカルパの作品の大半は改修か増築です。既存の空間に手を加えたり、新たな空間を付け加えることにより次代に伝えられる空間を創出するという作業は、新築とは異なった面白さがあり、その空間の変容が楽しみになります。

多くの改修・増築を行っているスカルパの場合は、「光」をキーワードとして空間をつくり出すことが多いように思います。光の取入口としての窓や開口部のデザインとして、その設えに手を加えることにより、空間に髣髴をつくり出す……など、繊細な空間操作が彼の特徴であろうと思います。

ヴェネチアから北東に車で2時間程行くと、スカルパの代表作である「プリオン・ヴェガ廟」があります。そこからさらに北へ進み、中世の街並みの残るアーゾロを通り、山道に掛かるところでポッサーニョという集落に入ります。そこに、この集落で生まれた彫刻家アントニオ・カノーヴァの作品を展示している美術館の増築である石膏像陳列室があります。

この石膏像陳列室では、白い空間の上隅部に異なるトップライトを設え、白い空間に陳列された白い石膏像に微妙な光を映すことにより、石膏像そのものを際立たせるというよりも、空間とともにある石膏像により、見えない光が見えて来るような効果があります。そのことは繊細なメタルワークとガラスによる展示台の構成にも言えていて、それらが何の違和感もなく存在しています。

その手法は、カノーヴァの製作した石膏像の展示というよりも、カノーヴァの彫刻を素材として使ったスカルパの作品の中に浸っているようです。年間どのくらいの人がこの美術館を訪れるのかはわかりませんが、どちらかと言えば、スカルパの作品を見に来る人の方が多いのでは……。

表紙 増築棟頂部のコーナーに穿たれたトップライト。繊細なメタルワークと大胆なガラス突きつけによる光のキューブが既存棟の屋根の瓦やアーチと対比して美しい

表2(大) トップライトはいくつかのパターンがあり、内側から見るとガラスの存在が飛んで、光だけが降り注いでくる

表2(小) エントランス脇にあるスカルパによる自画像。どのような経緯でここに描かれ、そのまま残ってしまったのかは知りませんが、スカルパがこの空間を気に入っていたことだけは確かでしょう

写真・文…高田典夫 たかた・のりお

1951年東京都文京区生まれ、東京工業大学卒業。横総合計画事務所、レンゾ ピアノ ビルディング ワークショップ ジャパン、ヘルム建築・都市コンサルタントを経て、アトリエテンを主宰。実践女子大学教授(建築デザイン研究室)、キャンパス計画室長も兼任





オリヴェッティ・ショールームの エントランス (1957~58)

空間を彩る
部分の魅力 3

ヴェネチア/イタリア
設計…カルロ・スカルパ(1906~1978)

サン・マルコ広場に面したアーケードの一角にあるオリヴェッティのショールームを初めて訪れたのは、2004年の暮れでした。その時はすでにオリヴェッティの手を離れてしまって、見るも無惨な観光客向けの画廊になっていました。その後、オリジナル・デザインに修復され、現在では、FAI(イタリアの自然と文化の環境保護に関わっている財団)の管理・運営のもと一般に公開されています。スカルパのデザインだけでなく、オリヴェッティ社の協力により、当時の最先端のプロダクト・デザインであるタイプライターも展示されていますので、この空間に入ると時間を越えて往時にタイムスリップしてしまったような感じになります。

床のガラスモザイクによるパターン、壁のテクスチャ、開口部のスクリーン、吊り材・目地などの金物のディテール、その中心に彫像のようにしつらえている階段、階段から続く心地よいプロポーションの吹抜け、そこに浮かぶように設えられている展示台……、小さな空間ですが、いたるところに目を惹かれます。

スカルパのディテール集のような空間です。

目に見えるところすべてに気を使って、細やかなディテールをつくり出しているのですが、それが嫌味にならないほどさらっとしている、という不思議な空間なのです。

改修に携わることが多かったスカルパの真骨頂というところでしょうか。

表紙 薄いスチール・テープの編み込みのスクリーンは、スカルパの定番です。真似をしたくなる魅力的なデザインで、何回か真似もしてみましたが、「スカルパ風」にはなるのだけれど、なかなかそれを超えることはできません
表2(大) アーケードから入り込む路地に面した壁が開くことは知っていましたが、今回初めてその開いている姿を見ることができました。たまたまサン・マルコ広場が水浸しになって、正面のエントランスから入ることができずに、この路地に面したカラクリのような扉から入ることになりました
表2(小) ガラスモザイクによる床のデザインと、水盤に繋がる吐水口。赤と白のガラスモザイクの大きさの違いが色の違いとともに美しさを演出しています

写真・文…高田典夫 たかた・のりお

1951年東京都文京区生まれ、東京工業大学卒業。横総合計画事務所、ロンズピアノ ビルディング ワークショップ ジャパン、ヘルム建築・都市コンサルタントを経て、アトリエテンを主宰。実践女子大学教授(建築デザイン研究室)、キャンパス計画室長も兼任





ヴェネチア建築大学入口 改装計画の門扉 (1966、1972、1976~78、1984)

空間を彩る
部分の魅力 4

ヴェネチア／イタリア
設計…カルロ・スカルパ(1906~1978)

サンタ・ルチア駅からカナル・グランデに架かった4番目の橋であるS.カラトラヴァがデザインした橋を渡って、ローマ広場をかすめて、パンドーポリ庭園を抜けて小さな運河を渡ると、トレンティーニ聖堂に面した広場に出ます。ヴェネチアのどこにでもあるような街角の広場の片隅にこの門扉があります。

ちよつとごついスチール・フレームに45°のラインによってグラフィカルにデザインされた吊り戸は、製図器具をモチーフとしており、広場のコーナーを引き締めています。入口に架けられているキャンチレバーのコンクリート底と、吊り戸に貼り付けられたかのような粗いテクスチャの白い石のバランスが絶妙で、不思議な安定感を醸し出しています。

広場を構成しているトレンティーニ聖堂やその他の建物は、それぞれ軸線が異なり、壁面線は揃っていませんが、それらのどれとも一致しない軸線を設定した門扉の向きが周辺を調停して広場の軸線を決めています。この計画は、スカルパのデザインした3つの計画案スケッチを基にして、セルジオ・ロスによって、スカルパの死後1984年に建てられています。スカルパのスケッチにはコンパスや三角定規などの製図器具がいくつも出てきて、それがデザインのベースになっていることが理解できます。それを直裁的ではなく、グラフィカルにデフォルメしたスケールが全体のバランスを調停しているようです。

表紙 テクスチャの異なる素材を幾何学的に配置して、グラフィック・デザインのようにバランスをとる……、スチールのフレームの組み方、見せ方、貼り付けられた白い石の配置とコーナーの切り方が絶妙です。それとともに、動く機構をデザイン要素としてうまく取り込むことによって、軽さを表現しているように見えます

表2(大) スケールアウトしているように見えるコンクリートの底の片側がコンクリートの壁から浮いているという、構造的には結構アクロバティックな構成になっています

表2(小) 門扉と建物の間に古い扉の外枠が横たえられていて、それを活かすように、細かい段床で泉水を構成しています。スケッチを見ると、この古い扉の外枠はこの場所に落ち着くまでに、このコーナーの中を動き回っているようで、スカルパのデザインの重要な位置を占めているように見えます



写真・文…高田典夫 たかた・のりお

1951年東京都文京区生まれ、東京工業大学卒業。横総合計画事務所、レンゾピアノ ビルディング ワークショップ ジャパン、ヘルム建築・都市コンサルタントを経て、アトリエテンを主宰。実践女子大学教授(建築デザイン研究室)、キャンパス計画室長も兼任

建築士

K E N C H I K U S H I

特集

第58回建築士会全国大会
石川大会へのいざない

2015 May Vol.64 No.752

5



ヴェローナ市民銀行本店の通用口 (1973~81)

空間を彩る
部分の魅力 5

ヴェローナ/イタリア
設計...カルロ・スカルパ (1906~1978)

ヴェローナは、「ロミオとジュリエット」の舞台となった街で、夏の野外アリーナのオペラでも有名な街ですが、建築関係者にはスカルパ詣に欠かせない街でもあります。この街にある「カステルベッキオ美術館」と「ヴェローナ市民銀行」は、スカルパの作品のなかでも重要な位置を占めています。「カステルベッキオ美術館」については後日取り上げることとして、今回は「ヴェローナ市民銀行」を取り上げます。

この建物も、他の多くのスカルパの作品と同様に、既存建物の改修と増築というもので、スカルパが客死した1978年には、構造とファサードはできあがっていて、内装についてもほとんどが手配されていたようですが、彼の死によって、弟子のアリゴ・ルーディがプロジェクトを引き継ぎ、完成させました。

街の中心にあるアリーナ前の広場から伸びるほどよいスケールの路地をしばらく進むと、街なかにぽっかりと空いた空間に出ます。その広場越しに見えるこの建物のファサードは、周囲の建物とスケールは合っているものの不思議な存在感があり、ちょっと目を引きます。大小の少し歪んだ円、四角形、長方形のスリットなど、さまざまな形の開口がなんとも言えない絶妙なバランスで配置されて、緊張感が感じられます。建物としては裏面に当たるこのファサードがこの建物の顔になっています。

表紙 スカルパのデザインのなかで繰り返し現れるギザギザのコーニスが特徴的なこのファサードは、ポッティチーノ大理石の下部とロッソ・ヴェローナ大理石によるギザギザのコーニス、コッチオベスト・プラスターの塗壁と最上部の鉄とガラスによるロジアで構成されていて、その要のような位置にこの通用口が穿たれています

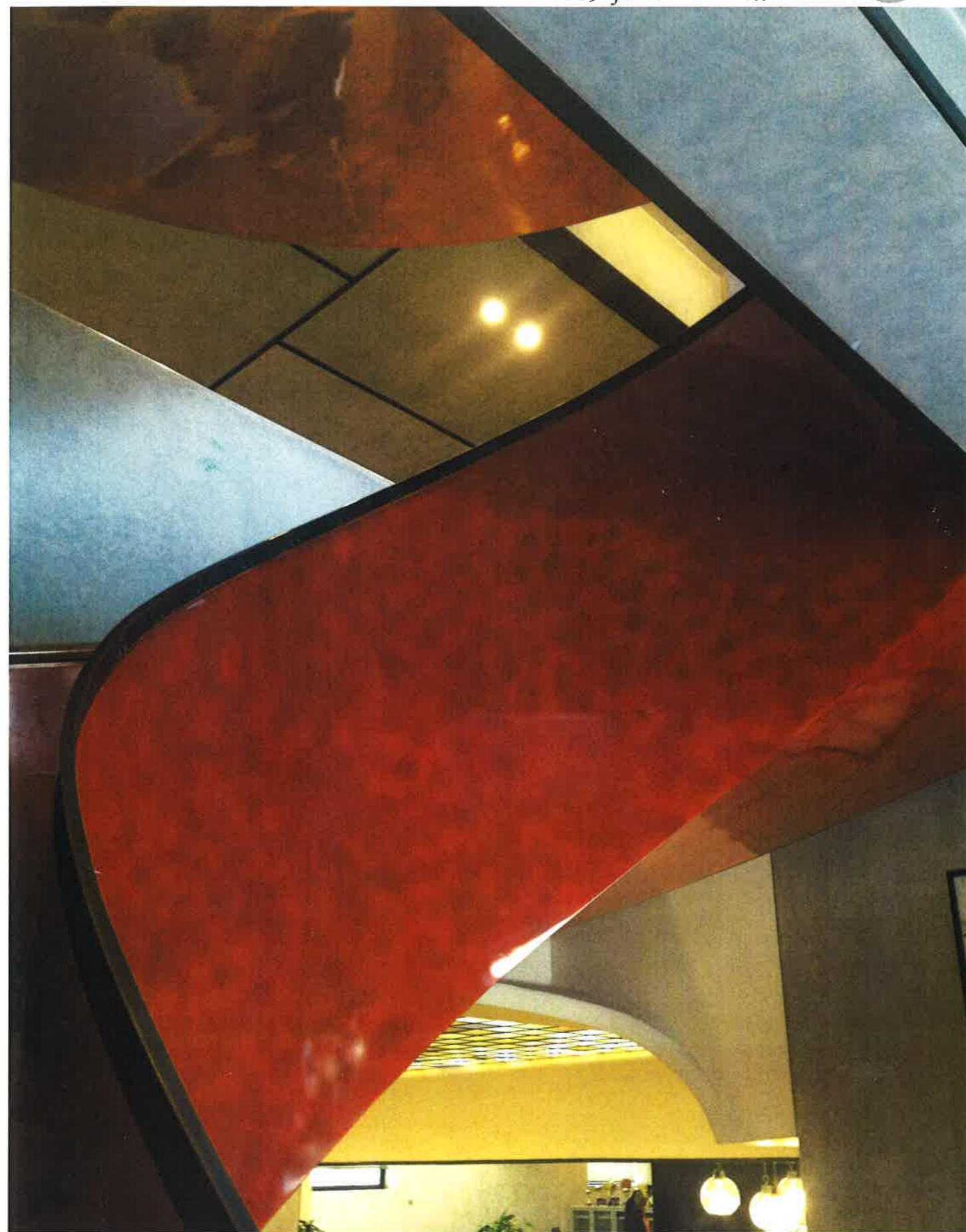
表2(大) 街なかの駐車場となってしまう広場に面したファサードは、さまざまな形の開口をシンメトリーを崩すように配置した独立した壁を立てることで構成しています。この広場が人が佇める空間ではないのが残念

表2(小) 壁に穿たれた開口のなかで、出窓のように設えられた開口を支えているように見える装飾的な線型は、水平に設えたコーニスと同じディメンションですが、その位置、形状から異質に見え、その開口を差別化しています



写真・文...高田典夫 たかた・のりお

1951年東京都文京区生まれ、東京工業大学卒業。構総合計画事務所、レンゾ・ピアノビルディング ワークショップ ジャパン、ヘルム建築・都市コンサルタントを経て、アトリエテンを主宰。実践女子大学教授(建築デザイン研究室)、キャンパス計画室長も兼任



ヴェローナ市民銀行本店のインテリア (1973~81)

空間を彩る
部分の魅力 6

ヴェローナ/イタリア

設計…カルロ・スカルパ(1906~1978)

先月に引き続き「ヴェローナ市民銀行」を取り上げます。今回はそのインテリアです。

このヴェローナ市民銀行は、現役の営業している銀行ですから、営業室を覗くくらいはできるかもしれないけど、内部をきちんと見学したり、写真を撮ったりすることができるとは思っていませんでした。事前の交渉の結果、営業時間前1時間なら内部の見学可能ということになり、朝食もそこそこに現地に向かいました。

旧館の玄関から階段を上り、旧館と新館をつなぐトンネル状の渡り廊下を通り、新館の内部に……。

そこが写真ではよく見ていたオフィス空間です。この3階の空間は機能的には廊下ということになりますが、水平に拡がってロビー空間となっています。この空間には、2本一組の柱、その柱列に呼応した天井目地、赤い曲面で構成されたエレベーター・シャフト、壁面に開けられたくり型など、自由奔放なディテールが展開されていますが、それらが絶妙なバランスで空間の中に配されて、美しいシーンをつくり出しています。

が、この空間のプランを描こうとしても、きちんとイメージできないという不思議な空間でした。

オフィスと銀行営業室を結ぶ赤い螺旋階段は、空中に浮かぶ彫刻のような存在です。きれいに磨きだされたスタッコは、光を反射すると同時に吸い込まれていくような不思議な質感で、今にも動き出しそうな生き物のように見えます。空間を構成する素材、そしてその仕上げの使い方が、スカルパの空間をつくり出しているのだということがよく理解できるインテリアでした。

表紙 オフィスと銀行営業室をつないでいる鮮やかな赤色のスタッコ・ヴェネツィアーナ仕上げの螺旋階段。空中に浮かぶ滑らかな赤い曲面が美しい。この螺旋階段を降りながら眺める営業室の天井やトップライトの納まりはなかなか見応えがありますが、じつはこの階段、客用ではなく、社員用とのこと。たまたま臨時の見学ルートで見ることができました

表2(大) 2本一組の柱は、この建物のデザイン・モチーフの一つで、多面体の打放しのコンクリートに靴をはかせたようなブロンズの基壇と、天井近くのゴールドのリング、そして、その柱列に呼応した天井の目地割りなど、自由奔放なデザイン要素が絶妙なバランスで配されています

表2(小) 街の広場に面したファサードを構成するスチール・サッシとスタッコ壁に開けられたくり型の納まり。絶妙な納まりとそれを可能にしているスチール・ワークの繊細さと大胆さが、スカルパのディテールの美しさです



写真・文…高田典夫 たかたのりお

1951年東京都文京区生まれ、東京工業大学卒業。横総総合計画事務所、レンゾ ピアノ ビルディング ワークショップ ジャパン、ヘルム建築・都市コンサルタントを経て、アトリエテンを主宰。実践女子大学教授(建築デザイン研究室)、キャンパス計画室長も兼任



カステルベッキオ美術館の 城壁内物見塔への階段 (1957~64、1968~69、1973~75)

ヴェローナ／イタリア
設計…カルロ・スカルパ(1906~1978)

空間を彩る
部分の魅力 7

ヴェローナのもう一つのスカルパ作品、カステルベッキオ美術館です。

廃墟となっていたスカリゲロ城を、ヴェローナ市中世およびネオ・クラシック美術のコレクションを収蔵するために1924年に当時の様式に従って復興されかけたものの、未完成な状態でおかれていましたが、1958年の「アルティエロからピサネッロまで」と題された展覧会の開催を機に、スカルパによる復興デザインが始まり、当初の計画は1964年に完了しました。その後、既存建物の改修や新しい形態要素を付け加えるなど、美術館として整ったのは1975年でした。

カステルベッキオ美術館の展示で最も印象深く、美しいのは、古い城壁と美術館の間の通路スペース上部に展示されている「カングランデの騎馬像」だと思います。

1階の通路からは見上げることになり、2階の展示スペースへのアプローチ・ブリッジからだと近すぎて全容がつかめず、脇に建つ古い城壁の屋上回廊からだと見下げ……、それぞれ魅力的な騎馬像を見ることができますが、全容がよくわかりません。そこで見つけ出したのが、堀のある中庭を挟んで建っている市街側の城壁の物見塔です。

騎馬像を見下ろした古い城壁の屋上回廊を辿って物見塔まで、そこで目にしたのが、この階段です。騎馬像を見に来たことも忘れて、この階段の虜になってしまいました。

表紙 階段好きにはたまらない魅力的なコルテン鋼折曲げのシンプルで美しい階段です。城壁のレンガ壁に無造作にボルト留めされた納まりも素敵です。でも、この階段もスカルパのデザインなんだろうか？

表2(大) 表紙の階段を上った城壁内の物見塔から眺めたカングランデの騎馬像。このアングルから見たかったのです。カングランデの騎馬像の展示位置、展示方法などに関してはスケッチが残っているようですが、この城壁の存在も関係しているのでしょうか？

表2(小) スカルパのスチール・ワークは鉄の塊から削りだしたような質感の重みがあります。特に、それぞれのエレメントが取り合う部分の切り替えが絶妙です。このような端部の取り合いだけをコレクションしても見応えあり、です



写真・文…高田典夫 たかたのりお

1951年東京都文京区生まれ、東京工業大学卒業。横総合計画事務所、レンゾ ピアノ ビルディング ワークショップ ジャパン、ヘルム建築・都市コンサルタントを経て、アトリエテンを主宰。実践女子大学教授(建築デザイン研究室)、キャンパス計画室長も兼任



カステルベッキオ美術館の スチール・ワーク (1957~64, 1968~69, 1973~75)

空間を彩る
部分の魅力 **B**

ヴェローナ/イタリア
設計…カルロ・スカルパ (1906~1978)

スカルパの空間の魅力は、その空間を構成している素材の使い方、納まりの妙でしょう。

特に、改修・増築の空間ではそのことがよくわかります。もともと使われていた素材を活かしながら、そこに新たな構成要素を付加する、そのバランスがなんとも言えない空間を醸し出しています。

今回は先月号に引き続き、ヴェローナのカステルベッキオ美術館からのピックアップです。

古いのに新しい……、新しいのに古い……。

その中でも、スチール・ワークにその特徴が際立っています。スカルパのデザインの魅力は、そのスチール・ワークがこれ見よがしに主張しているわけではなく、もともと空間の中にあっただけではないかと思わせるようなバランスのよさからくるのだらうと思います。1階の連続する展示室の、最終室の展示防護用柵とスチール・テープの編み込みの扉、カングランデの騎馬像の展示台周辺のエッジの納まり、そして手摺。その場に立つと、そこにあることが当然のように主張しているわけではないけれども、通り過ぎた後になぜか気になります。だから何回見ても(とはいっても2回しか見ていませんが)心惹かれるシーンが現れてきます。前にもちゃんと見ているはずなのに……。

カステルベッキオ美術館がスカルパの代表作の一つであることに異論はないでしょうが、そのしつこいまでに重ねられたディテールの結果としての「さりげなさ」がその魅力をつくり出していることに、ちょっと驚きます。

表紙 ももとの開口部の内側に絶妙なバランスで取り付けられたスチール・テープ編み込みの引き戸とそのレール、展示室の中ほどに設えられた展示防護用の柵、どちらも大胆な設えを支えている繊細なディテールワークがバランスをとっています

表2(大) カングランデの騎馬像のための展示用の設え。コンクリートとスチールと木の取り合いが美しいです。コンクリートのエッジの納まりとしてのスチール・ワークが、打放しコンクリートの美しさを際立たせています

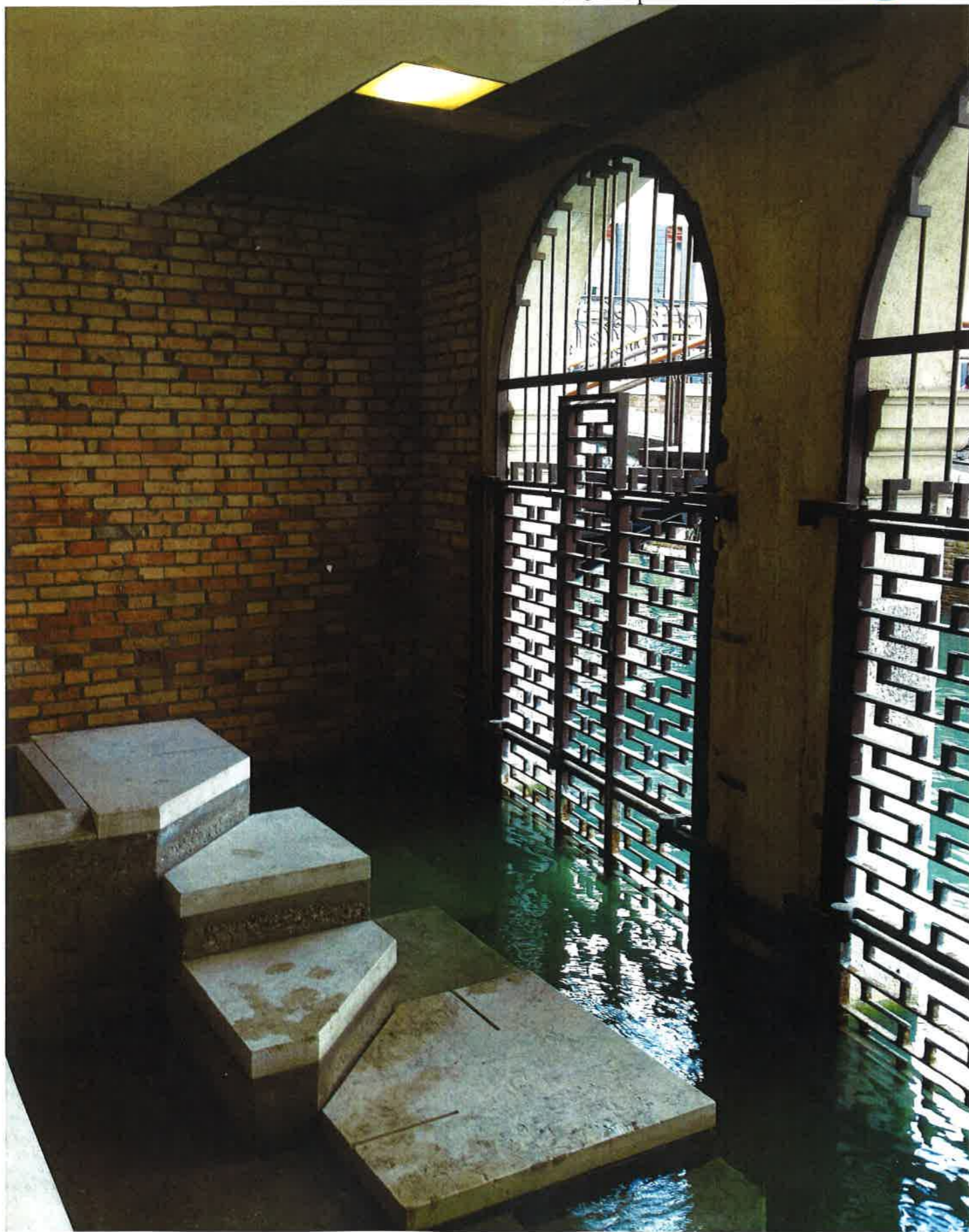
表2(小) 先月号に引き続いて 鉄の塊から削りだしたような質感の手摺の端部ディテール。どれとして同じものではなく、しかし、うるさくありません。この納まりに限らず、このようなディテールを実現してくれる職人の存在がうらやましいです



写真・文…高田典夫 たかた・のりお

1951年東京都文京区生まれ、東京工業大学卒業。横総合計画事務所、レンゾ ビアノ ビルディング ワークショップ ジャパン、ヘルム建築・都市コンサルタントを経て、アトリエテンを主宰。実践女子大学教授(建築デザイン研究室)、キャンパス計画室長も兼任





クエリーニ・スタンパーリア財団 1階ホールの改装 (1961~63)

空間を彩る
部分の魅力 9

ヴェネチア/イタリア
設計…カルロ・スカルパ(1906~1978)

サン・マルコ広場からヴェネチアらしい迷路のような路地を少し歩くと、サンタ・マリア・フォルモーザ教会に面したちょっとした広場に出ます。この広場の南側の運河を挟んで、この建物があります。

建物の中まで運河を引き込むようにつくられた船着き場と、その脇にかけられたディテールの美しい太鼓橋が、この建物の存在を示しています。

古い貴族の居宅であったこの建物の1階部分の改修にあたって、広場から直接アプローチできる橋を設けること、水位の上昇に対処できる入口をつくること、そしてポルティゴ・アウラ(集会室)と中庭の活用が、その課題でありました(中庭の活用については1月号を参照ください)。

運河を行き交う gondola の引き起こす水の動きが、船着き場の内部に光の揺らぎをつくりだすとともに、水の音、広場の音が、細やかなディテールの格子戸を通して伝わり、外部空間と内部空間の曖昧な中間領域を構成しています。この船着き場に佇んでいると、その空間の意匠は明らかに日本のものとは異なりますが、どこか日本的な空間構成に、なぜかほっとします。

この建物のエントランスとしてつくられた空間は、現在はエントランスとしては使われておらず、運河から少し入った路地側に、マリオ・ボッタのデザインした新しいアクセス・ホールがあります。

表紙 階段状に踏み石を並べて、運河の満ち引きに対応しています。運河に面した細やかなディテールの格子戸によるスクリーン効果や飛び石のような床の配置に、日本的な印象を感じます

表2(大) アクセス用に架けられた橋は、軽やかで、ディテールが美しい。楕円状に成型された木と金属の取り合いの細やかさや、それを支えている鉄の力強さに見とれてしまいます。このブリッジを渡ってアクセスしたかったなあ……

表2(小) 船着き場とエントランス・ホールの中の古い建物と新しく構築された壁との取り合い部分。仕上げの間から下地がはみ出したような不思議なディテールで、ちょっと気になりました。でも、美しい

写真・文…高田典夫 たかた・のりお

1951年東京都文京区生まれ、東京工業大学卒業。横総合計画事務所、レンゾ ビアノ ビルディング ワークショップ ジャパン、ヘルム建築・都市コンサルタントを経て、アトリエテンを主宰。実践女子大学教授(建築デザイン研究室)、キャンパス計画室長も兼任





ブリオン・ヴェガ廟のエントランス棟 (1970~72)

空間を彩る
部分の魅力 10

サン・ヴィート/イタリア
設計…カルロ・スカルパ(1906~1978)

ヴェネチアからトレヴィソを通って車で2時間ほど北西に行ったサン・ヴィートという農村の田園風景のなかにあるブリオン・ヴェガ廟は、スカルパにちょっとでも関心がある人は訪れてみたい場所の一つであろうと思います。

この地に生まれた夫の死を記憶にとどめるためにブリオン・ヴェガ夫人がスカルパに家族のための墓地の全体計画を依頼するところから、この計画は始まります。古い建物の改修や増築が多いスカルパの作品のなかでは、計画の機能についても、予算についても、ほとんど制限を受けることなく進められた初めてのプロジェクトと言えます。

この地に昔からある墓地の2辺に接するL字型の敷地を設定して、そこにブリオン夫妻の墓、家族の墓、礼拝堂、池に浮かぶパヴィリオンとエントランス棟を計画しています。

古い墓地を通してコンクリート打放しのエントランス棟に入ると、この建物のシンボルのようになっている2つの輪が重なりあった開口部が正面に見え、そこから低い塀で囲われた庭園が臨めます。エントランス棟とは言っても、天蓋のついた細い通路で、ここで動線は2つに分かれ、右手に進めばからくりのような仕掛けのゲートを通して、池に浮かぶパヴィリオンに繋がり、左手に進めば、エントランス棟沿いの細い水路に導かれて、庭園のなかのブリオン夫妻の墓に至ります。

エントランス棟は、記憶のなかに遡る仕掛けのような空間で、そこを通り抜けることで聖なる空間に至ることができる不思議な変換装置と言えます。

表紙 コンクリートの壁を切り取って金色のタイルで縁取りをすることで、重なりあった2枚の壁を強調して、建築空間というより、その隙間を際立たせています
表2(大) 塀に囲まれた庭園の南端を占める池に浮かぶパヴィリオンは折りの空間で、他の場所とは異なった趣きの空間になっています
表2(小) シルエットで見える2つの輪が重なりあった開口部と、エントランス空間のスケールのバランスが絶妙で見いってしまいます



写真・文…高田典夫 たかた・のりお

1951年東京都文京区生まれ、東京工業大学卒業。横総合計画事務所、レンゾ ピアノ ビルディング ワークショップ ジャパン、ヘルム建築・都市コンサルタントを経て、アトリエテンを主宰。実践女子大学教授(建築デザイン研究室)、キャンパス計画室長も兼任

